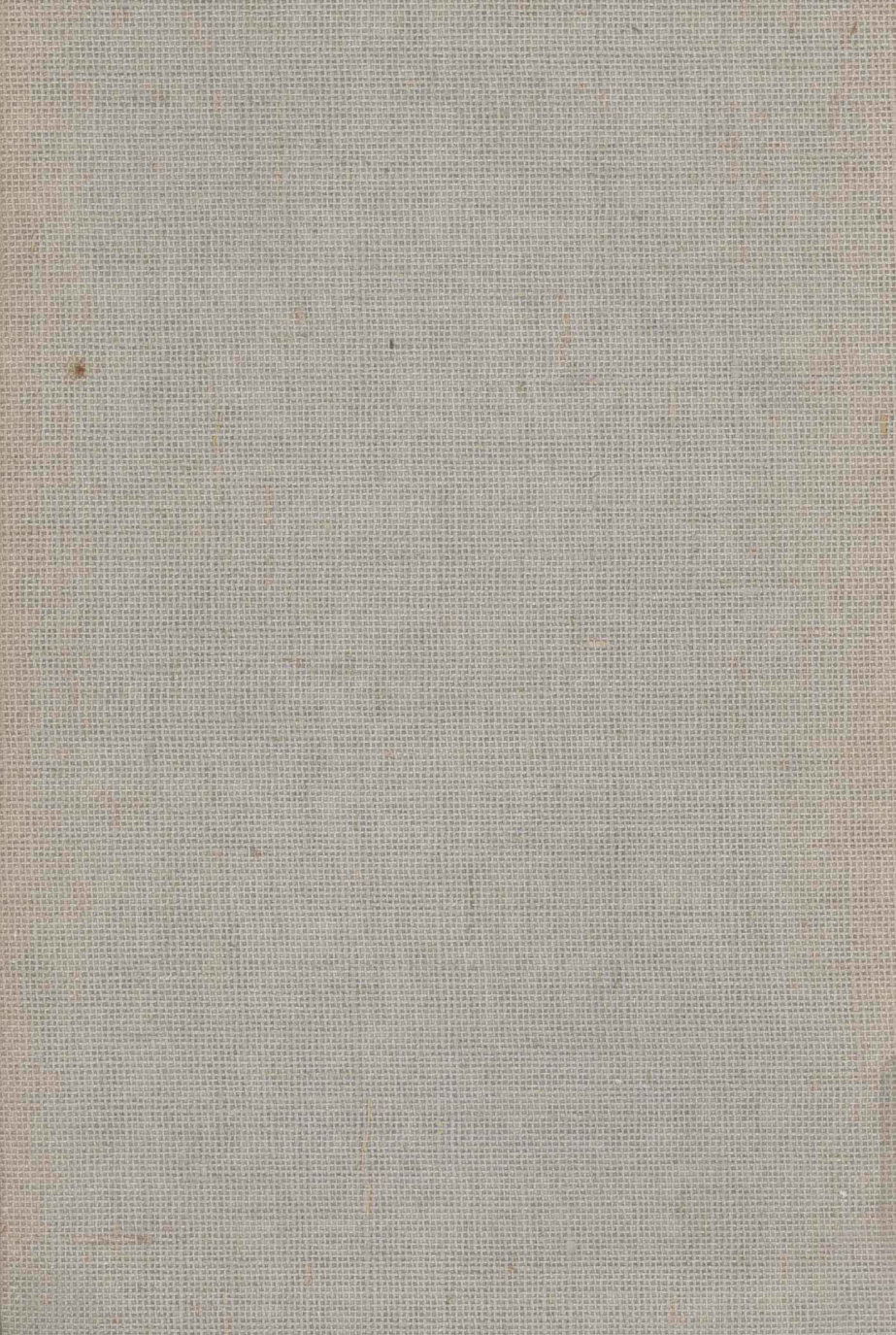




太宰治研究

奥野健男編

筑摩書房

太宰治研究

昭和四十三年四月三十日初版第一刷發行
昭和四十三年八月三十日初版第二刷發行

著者代表

福田恆存

編者

奥野健男

發行者

竹之内靜雄

發行所

株式會社
筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一—一九一

電話東京(二九)七六五(代表)

振替 東京 四一一二三

印刷・中教印刷

製本・鈴木製本

目 次

福田恆存	道化の文學・太宰治再論	四
臼井吉見	太宰治論	三九
平野謙	太宰治論	四〇
奥野健男	太宰治論——人間像と思想の成立	四三
龜井勝一郎	大庭葉藏	四四
神西清	斜陽の問題	四三
石川淳	太宰治昇天	四五
坂口安吾	不良少年とキリスト	二三
折口信夫	水中の友	三八
花田清輝	二十世紀における藝術家の宿命	四二

埴谷雄高

衡量器との闘ひ

一五四

竹山道雄

義

一五五

安岡章太郎

いたこの文體

一五三

ドナルド・キーン

日本と太宰治と『斜陽』

一七〇

佐古純一郎

太宰治とキリスト教

一七六

相馬正一

太宰治と Kommunismus

一八四

保田與重郎

佳人水上行・太宰治氏の文學

二〇九

正宗白鳥

太宰治小論

二二五

岩上順一

反俗と羞恥と

二二九

Ⅱ

井伏鱒二

解説

二三三

佐藤春夫

芥川賞・稀有の文才ほか

二五九

山岸外史

太宰と武藏野病院

二七九

檀一雄

熱海行

二九七

伊馬春部

悲劇名詞

三〇八

今官一

碧落の碑

三二三

田中英光

太宰治さんのこと・太宰治先生に

三三五

小山清

風貌

三三七

別所直樹

三鷹時代の太宰治

三三三

津島美知子

思ひ出の斷片

三六四

参考文献

……奥野健男・恆屋淳一編

三七三

後記

……奥野健男

四一五

太宰治研究

奥野健男編

道化の文學

福田 恆 存

一

いま太宰治論を書くならば、その心がまへは七年前の芥川龍之介論の續篇をものすつもりであればよい、とほくのうちにあるかれのイメージが教へてくれる。たしかに太宰は芥川が生涯のをはりに辿りついた地點から出發してゐる——しかもおなじ氣質をもつて。が、芥川の到達した終末點が、たんにかれ一個人の特殊な生涯の飽和點を意味せず、一時代の、一性格の、さらには人間存在そのものの、窮極の主題といふものに通じてゐたのであつたとすれば、そこに自己の出發點を見いだすといふことは——いや、もつてまはつたいひかたはやめよう——太宰治は芥川龍之介の生

涯と、作品系列とを、いはゞ逆に生きてきたのである。芥川龍之介はその一生のをはりに「或阿呆の一生」と自殺とを置いた。太宰治はその作家活動のはじめに、「齒車」や「或阿呆の一生」にならつて、「葉」や「思ひ出」などを書いてしまつてゐた。そして「その日その日が晩年である」やうなたそがれのうちで、いくたびか自殺をはかり、そのつど「生きよ」と現世につきもどされた——人生を逆に生きるよりはかにしかたはなかつたのである。

ぼくは二十冊にあまる太宰治の作品集を読みあさりながら、龍之介論を書いた七年まへの興奮をあらたにすると同時に、そこでぼくが發見し、守りぬかうとした眞實を、はたしていまこゝに超えうるかどうかといふ不安もまた感じている。が、ぼくはつぎのことを知つてゐる。太宰治論が芥川龍之介論のリフレインにすぎぬものとなれば、それはぼくが太宰のまへに自分を棄てきれなかつたことを物語るものにはかなならぬであらう。芥川を語つても太宰を語つても、つまりはぼくがぼく自身を語ることにしかならないといふ事實に、いまのぼくは批評の生理を誇らしげに吹聴する氣にはけつしてなれぬのである。それは批評家の勝利ではなくて敗北なのだ。にもかゝらず、批評文學の自律性だけは、なにものにかへても確保しなければならぬ。

ぼくがいまこゝに用ゐようとする方法は、對象にむかつてべたばれにほれぬいてみようといふことだ。阿諛し追従し、背なかを流させてもらひ、脚をさすらせてもらはうといふのである。元來、ぼくは長所をほめ、そのあとでぬかりなく弱點を指摘して引きあげるといふやりかたがきらひである。みづちく、貧乏くさくてやりきれないのだ。そんなことをするくらゐなら黙つてゐるがよい。徹底的に愛するか、徹底的に憎むか、そのいづれかだ。對象を愛しきつたとき、その弱點が、また對象を憎みぬくとき、その長所が、ぼくの眼にうつつてゐないわけではない。が、そこにかゝづらはずにあられないといふのは、つまり自己の愛憎の眞實に信をおけないからではないか。

對象にほれぬくこと——太宰治のばあひ、それはことに必要なのだ、かれの表現がぎざにみえるのは、かれがぎざな性格のもちぬしだからではなく、他人がかれをぎざと見なし、さうした他人の眼をかれの神経が感受するからにほかならない。かれは自分の苦惱の眞實を信じてくれる他人の存在を豫想できず、それゆゑにうろたへ、はにかみ、それがきはまつてポーズになるのだ。ぼくたちはかれを信じきればいゝ、愛しきればいゝのである。で、ぼくは決心した——太宰治がてれくさくていへないやうなことを、その

代理にばかづらしていつてやること。ひとはあるひはぼくの文章を糊と鉄とでつゞつた常識的な解説文と見るかも知れぬ。が、どう讀まうとそれは讀者の勝手といふものだ。

同時に、龍之介論でこゝろみたことを、ぼくはやはりここでももくろむかもしれない。相手にほれた以上、共鳴が過ぎて、ひとは心中を求めかねないのだ。もちろん、暴力はつゝしむ。しかしなだめすかして、おまへの考へてゐることはおれとすつかりおなじ、それからだ、人生とは……といったふうなくどきかたで、相手を混沌におとし入れ、そのじつ、こつちが相手の心にしたがふのではなく、その反對に相手を自分の意に屈従せしめ、しかも相手はけつこうぼくのおもひを自分の心と信じこんでゐるといつたふうに、暴力は用ゐずとも、やはりこれは無理心中であらう。が、作家論において、この相手といふのは、かならずしも太宰治そのひとではなく、それはあたりまへで、いくらぼくが牽強附會をしようとも、本人までがさうおもひこんでしまふわけはあるまい。だまされるとすれば、それはほかならぬ、この文章の讀者である。警戒すべし——もうとくに序論の部分は過ぎて、ぼくの口舌、手練手管ははじまつてゐるのである。こゝまで書いてきてぼくははつとばかりに筆を投じた。といふのは、太宰治そのひとの第一創作集『晩

年』のうち、「玩具」といふ短篇の一節をおもひうかべたからである。

ここまでの文章には私はゆるがぬ自負を持つ。困つたのは、ここからの私の姿勢である。

私はこの玩具といふ題目の小説に於いて、姿勢の完璧を示さうか、情念の模範を示さうか。けれども私は抽象的なものの言ひかたを能ふ限り、ぎりぎりにつつまなければいけない。なんとも果しがつかないからである。

すぐまたあとにかうある――

けれどもここに、姿勢の完璧を示さうか。情念の模範を示さうか。といふ問題がすでに起つてゐる。姿勢の完璧といふのは、手管のことである。相手をすかしたり、なだめたり、もちろんちよいちよい威したりしながら話をすすめる、ああよい頃ほひだなど見てとつたなら、何かしら意味ふかけな一言とともにふつとおのが姿を掻き消す。いや、全く掻き消してしまふわけではない。素早く障子のかげに身をひそめてみるだけなのである。やがて障子のかげから無邪気な笑顔を現はしたときには、相手のからだは意のままになる状態に在るであらう。手管といふのは、たとへばこんな工合ひの術のことであつて、ひとりの作家の眞摯な精進の對象である。(中略)

こちらで私は、私の態度をはつきりきめてしまふ必要がある。私の嘘がそろそろ崩れかけて來たのを感じからである。私は姿勢の完璧からだんだん離れていつてゐるやうに見せつけながらいつまたそれに返つていつても怪我のないやうに用心に用心を重ねながら筆を運んで來たのである。

ぼくの方法とまつたくおなじである。いや。いつのまにか、ほれた相手の氣質や口調がぼくにのりうつてきたのであらうか、いづれにせよ、これは、と筆を投じたゆゑである。ところで「姿勢の完璧」「情念の模範」とはいつたいなにを意味するのであらうか。『晩年』中の諸作を書いた四、五年のち、昭和十五年、太宰治は「東京八景」といふ私小説ふうの作品を書いてゐるが、そのなかで、この二つの擬つた措辭の意味を、あつけないほど平明に釋明してゐる。

その頃の文壇は私を指して、「才あつて徳なし。」と評してゐたが、私自身は、「徳の芽あれども才なし。」であると信じてゐた。

「情念の模範」とは「徳」のことであり、「姿勢の完璧」とは「才」のことである――といつてしまへば、まことに味もそつけない話であるが、それを「情念の模範」「姿勢の完璧」といふやうなことはで語らなければならなかつたところに、ミステイフィケーションの名手である太宰治の眞實がある。太宰治の眞實――と、いまぼくはいつた。さういふことになれば、「情念の模範」とは、このかれの眞實だといひなほしてよろしく、それを造型的に定著しうる形式こそ、ほかならぬ「姿勢の完璧」なのである。太宰

治の精神的眞實は傾斜面のうへに撒かれた砂粒のごときもので、靜止のすがたを保つことができず、たえず滑り流れる。したがつて、これをとらへようとすれば、いきほひ砂粒の流れとともに身を流動せしめ、瞬間瞬間に堰を造りつつ、なほその堰を漏れてこぼれる流れを追ひかけ、追ひかけ、砂粒とともにどん底まで落下してゆかなければならぬ。その敏捷に身をひるがへす輕業に、作者は「姿勢の完璧」を祈願するのだ。醜く崩れてはならぬ。といつて、一粒でも漏らしてはならぬ。どん底まで落下するといつたが、傾斜の眞實は傾斜のうちで定著してしまはなければならぬので、傾斜のをはつた平面にまでころげおち、堰きとめかねた砂を浴びて、ぶざまに尻もちをつくことは斷じてできぬ。藝術家にとつてこれほどの屈辱はない。太宰の矜持がそれを許さぬ。

「嘘がそろそろ崩れかけ」、「姿勢の完璧からだんだん離れていつているやうに」みえても、じつはそこにこそ「姿勢の完璧」が賭けられてゐるのだ。姿勢はくづれ、才もおよばず、ことばといふもののもつてゐる能力をともしれば超えようとする眞實であればこそ、「姿勢の完璧」が必要になつてきたはずではなかつたか。底をわらずに語れる嘘であるならば苦勞はない。さういふ文學上のフィクションを

ひとはそれまでリアリズムと呼んできた——もちろん、フィクションであるといふ自覺もなしに——だからリアリズムと名づけたのだ。が、ひとたびそれが嘘と氣づけば、もうどうしても眞實を語れぬくやしにまぎれに、今度はいやがうへにも嘘をつく。芥川龍之介の初期の作品がそれだ。作者はそれが嘘だと知つて——讀者がそれを嘘として讀んでくれるのを知つて——ほつと安堵の息をもらす。なぜなら、眞實を語れぬかれではあつても、はつきり嘘として提出してゐる以上、すくなくとも嘘つきといふ非難からだけはまぬかれてゐるといふものだ。かれは嘘にたへる。が、それはなんといふ苦業であることか——嘘にたへるといふことは、隠された眞實がかれに愁訴し、謀反する。かれの立つてゐる地面は徐ろに傾斜しはじめ——そら、砂粒の流れが流れはじめ。嘘はくづれ、いまでは眞實が反撥しあひ、虚が實を堰けば實はこの堰を破り、混沌のうちに、いつしか實が虚を堰きとめ、虚がこの堰を破つて逃げる——虚實の相對性。

太宰治はこゝから出發した。「晩年」中の「猿面冠者」「玩具」「めくら草紙」「道化の華」、その直後の作品「狂言の神」「ダス・ゲマイネ」、それから五年後に書かれた「春の盜賊」などにおいて、その間の消息がはつきり讀みとれ

るであらう。讀者はひとつの堰のうちにしばらくなじむや、いきなりそれは嘘だつたと告げ知らされる——そんなところにおればゐない、と作者はげらげら笑ひだす。たえず隠れた場所を變へる。あのかくれんぼ。單純な讀者は、きさだ、いやみだ、輒晦だと、つひには怒つて本を投げだす。輕薄才子のたはむれ、ごまかし——砂粒ほどの眞實もないために、あるひはひとかけらの眞實を意味ありげにもつた、いふつてちらつかせ、さうすることによつてひどく巨大なものにおもひこませようといふ術策だときめつける。たしかに運動するものは質量の大いさを錯覺させる。が、これはまたなんと輕率な非難であることか。

みごとだ——太宰治の輕業はまことにみごとである。ぼくは羨望をとほりこして嫉妬を感じる。堅固な堰のなかにちんまりをさまつた眞實といふものが見たいならば、志賀直哉を讀め。現實描寫の適確さに感心したいならば——頂門一針、「めくら草紙」の末尾につきのごとくある。

いま、讀者と別れるに當り、この十八枚の小説に於いて十指にあまる自然の草木の名稱を挙げながら、私、それらの姿態について、心にもなきふやけた描寫を一行、否、一句だにしなかつたことを高い誇り以て言ひ得る。さらば、行け！
「この水や、君の器にしたがふだらう。」

二

さて、こゝでふたゝび、「ぼくははつとばかりに筆を投じた」といふところにもどらなければならぬ。ぼくはそのあとで「玩具」の一節を引用した。だが、あのときぼくの脳裡に浮かんたのは、じつは「春の盜賊」だつたのである。が、さすがにそれは引用しかねた——あまりにぼくの口とそつくりで、もちろん「春の盜賊」をぼくは讀んでゐるのであるから、これはどうしてもぼくがまねをしたことになつてしまふからだ。その一節に曰く——

またしても、これは、私生活の上の話ではないか。おまへは、ついさつき、物語のなかに私生活の上の辯解を附加することは邪道であると明言したばかりのところでは無いか。矛盾しないか。矛盾してゐないのである。そろそろ小説の世界の中にはいつて來てゐるのであるから、讀者も、注意が肝要である。

ぼくもおなじことを書いたはずだ。太宰治にべたぼれにほれるといひながら、無理心中してもぼくのおもひを代辯させるといつた。これは矛盾ではないか。矛盾ではない。

序論はすでにすぎて、批評の世界にはいつてきたのであるから。ぼくは右の一節を引用したくはなかつたので、すどほりをきめこんだ。が、やはりさうはいかなくなつた。なぜ引用したくなかつたかといへば、ことは批評家の、いや、

批評文學そのものの、權威にかゝはるからである。ぼくのオリジナリティが危殆に瀕するからである。太宰治を發見したのはあくまでぼくであつて、太宰治自身がすでに太宰治を發見しているといふことになつては困るのである。さうなつたのでは、批評家の眞實は、ぼくの眞實は、いつたいどこにあるといふのか。が、ひるがへつて考へれば、それこそ近代の批評家の惡癖、どうしてすなほに註釋者、説者に甘んじきれぬのか。

僕の小説が古典になれば、——ああ、僕は氣が狂つたのかしら、——諸君は、かへつて僕のこの註釋を邪魔にするだらう。作家の思ひも及ばなかつたところにまで、勝手な推察をしてあげて、その傑作である所以を大聲で叫ぶだらう。ああ、死んだ大作家は仕合せだ。生きながらへてゐる愚作家は、おのれの作品をひとりでも多くのひとに愛されようと、汗を流して見當はづれの註釋ばかりつけてゐる。そして、まづまづ註釋だらけのうるさい駄作をつくるのだ。勝手にしろ、とつづばなす、そんな剛毅な精神が僕にはないのだ。(「道化の華」)

「剛毅な精神」がないのはぼくのはうだ——だから批評家とかいふものになつて、自分の作品ならぬ他人の作品を相手に「註釋だらけ」どころか、註釋だけの駄文をつくる。それがいかにもつらいのだ。しかも太宰はそのつらさを知つてか知らでか、すぎまだらけの大家を羨みながら、批評家の先手をうつて、もう手のまはしやうがないほどに自分

で自分を發見し、限定し、註釋してしまふのである。ぼくはこゝにいたつて愕然とした——ぼくが太宰治の註釋をはたしえぬのは當然で、氣がついてみれば、太宰治のはうでさきにぼくを註釋してゐるのだ。ぼくはかれの投げた網のなかでもがきつゝ、どこにも頭の出しやうがないのである。さきほどの一節もぼくが太宰治をまねたのではない、太宰がさきにぼくをまねたのではないか。

「虚構の春」のうちで「僕は、あの男(佐藤春夫)のためには春夫論を書いた。けれども、君に對しては、常に僕の姿を出して語らなければ場面にならないのだ。」といふことばを、作者あての書簡のうちにいれてゐる。が太宰治は「虚構の春」ではまことにたくみな分身の術を用ゐてゐるので、この「僕」も「君」も、ともに作者そのひとにはかならない。この分身の術はその後もしばしば用ゐられ、「風の便り」「新ハムレット」などにおいてもみごとな効果を發揮してゐるのだが、「新ハムレット」は鎌倉文庫版「猿面冠者」中にも集録されてをり、その「あとがき」に「この作品の出版當時、これに對する文壇の評論の大半は、クローヂヤスのこの新型の惡を見のがし、正宗白鳥氏などもこのクローヂヤスに作者が同情してゐるとさへ解されてゐたやうである。さらにこのたび、ひろく讀者に、再吟味を

願ふ所以である。」と書いてゐる。それほど手のこんだものになつてゐるのだ。というのは、このすぐれた心理家太宰治のうちに作者自身にとつて無意識の領域を發見することなど至難の業であるといふことにはかならない。「僕の姿を出して語らなければ、場面にならない」どころか、ぼくの姿の出しやうがないので、おそらく讀者はかうしてわづかに自分のすがたをのぞかせようとするべく自身の表情がうるさいであらう。ぼくは太宰治の「僕の姿」のまへに手ぶらで退場することに意を決した——恥をかゝぬうちにでは、どうして——もう警戒しなくてもいい。ぼくのこゝではない、太宰治の話なのだ——かれは分身の術を用ゐずにあられなくなつたのか。自意識過剰——なるほど、いや、そんな淺はかな、文學青年じみた、まゝごとに、太宰治はうつゝをぬかしてなどゐはしなかつた。太宰治自身どう考へようと、それだけはぼくの信頼を信じてよい。また「ぼく」だ——大きく出たものだななどといふなかれ。

つまり、この二人は藝術家であるよりは、藝術品である。

〔道化の華〕

彼は彼の制作より寧ろ彼の爲人の裡に詩を輝かす病的、空想的の人物であつた。〔虚構の春〕

君は、ボオドレエルを摺むつもりで、ボ氏の作品中の人間を、兩眼充血させて追ひかけてゐた様だ。我は花にして花作り、我は傷にして刃、打つ掌にして打たる頬、四肢にして拷問車、死刑囚にして死刑執行人。(同上)

君を、作中人物作家よと稱して、扇のかげ、ひそかに苦笑をかはす宗匠作家このごろ更に數をましてゐる有様。(同上)

藝術が私を欺いたのか。私が藝術を欺いたのか。結論。藝術は、私である。(東京八景)

べつにぼくの無器用な説明を必要としまい。もしさらに説明が欲しいならば、太宰治そのひとに聴くがよい。

わづかな興を覺えた時にも、彼はそれを確める爲に大聲を發して笑つてみた。ささやかな思ひ出一滴の涙が眼がしらに浮ぶときにも、彼はこぞと鏡の前に飛んでゆき、自ら悲歎に暮れたる佻しき姿を、はればれと眺めた。取るに足らぬ女性の嫉妬から、些かの掠り傷を受けても、彼は怨みの刃を受けたやうに得意になり、たかだか二萬法の借金にも、彼は、(百萬法の負債に責苛まれる天才の運命は悲慘なる哉。)などと傲語してみ。(虚構の春)

これではつきりわかつたはずだ。ロマンチスト太宰治は現實の自分をひどく好かないのである。で、たれか自分の氣にいつたものの役を演じたいのだ。「ボオドレエルの一行」を鑑賞するのではなく、それを身につけたいのである。